

鬼退治の後裔

——観家伝来資料をめぐって——

一 麻呂子親王鬼神退治説話とその伝承圏

丹後と丹波の国境に聳える大江山には鬼が住み、それを都からやってきた英雄が退治するという話が古くから語り継がれてきた。源頼光が配下の四天王をともなうて酒吞童子を退治した話はことに有名で、お伽草子となつて多くの本を伝え、また能の『大江山』にも作られて人々に親しまれてきた。

しかし、大江山周辺には七仏薬師を信仰する圏内に、もう一つの鬼神退治の話が伝承している。それが、麻呂子親王が薬師如来を信心して自ら七体の薬師像を刻んで造立し、天照大神の加護をうけて見事に鬼神を退治するというものである。この話は、丹後と丹波の七仏薬師を本尊とする寺院や麻呂子親王を祀る神社によつて縁起として伝えられており、いわば地域に根ざした話と言えよう。

次に、現在、所在が確認できる縁起とそれに準ずる文献資料を伝承地別に列挙し、その所在地を地図上に示した。なお、※印を打つたものは原本未見資料である。

A 清園寺（京都府大江山町守）

E 施養寺（京都府加悦町）

- ※ 9 『多福寺縁起』西蔵院蔵 卷子本一軸。享保二年の奥書。尾寺慈翁等空文井書の奥書。
- 8 『丹後医王山多称寺来由記』卷子本一軸。文化九年前松尾寺慈翁等空文井書の奥書。
- D 多称寺（舞鶴市多称寺）中期写。
- 7 『丹後國加佐郡河守庄佛性寺縁起事』卷子本一軸。江戸文政八年の神慶造寄進帳。
- C 仏性寺如来院（京都府大江山町仏性寺）
- ※ 6 『丹後國竹野郡齋宮大明神御神慶造寄進帳』戸初期の縁起絵巻。
- 5 『清明神縁起』絵巻一軸。内題「齋宮大明神之縁起」。江戸縁起絵巻。
- 4 『等夷寺縁起』絵巻一軸。前半を欠く端本。室町末期の縁起絵巻。
- B 竹野神社（京都府丹後町）
- ※ 3 『清園寺古縁起』写本一冊。江戸時代前期の成立。
- 園寺縁起』の絵解き台本。
- 2 『当山略縁起』写本一冊。天保十二年の奥書。掛幅絵『清園寺縁起』掛幅絵三幅。十四世紀前半の製作。
- 1 『清園寺縁起』掛幅絵三幅。十四世紀前半の製作。

小林 健二

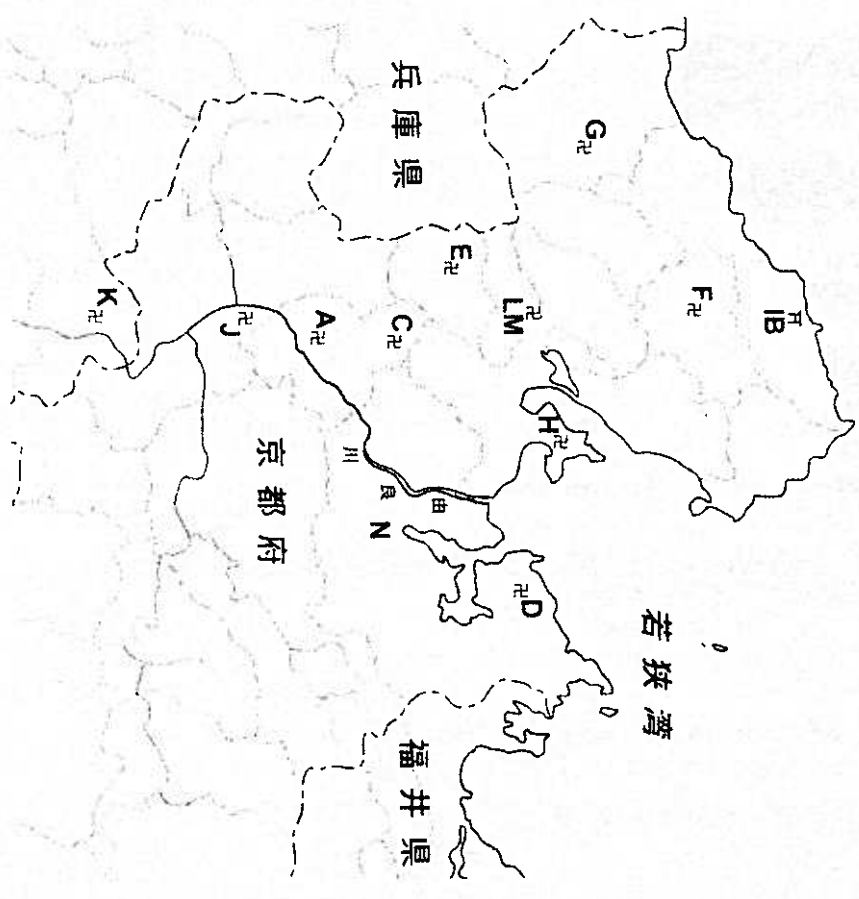
- 10 『薬師如来縁起』写本、仮綴じ一帖。外題「薬師如来縁起之寫」。明治十年等海写の奥書。
- 11 『施薬寺略縁起』写本、仮綴じ一帖。前半のみで後半を欠く。江戸末より明治初写か。
- 12 『施薬寺縁起』写本、仮綴じ一帖。元禄十年の奥書。
- 13 『丹後園竹野郎等樂寺縁起』未軸装の卷子本一軸。江戸時代後期の書写。
- G 円頓寺（京都府久美浜町）
- 14 『円頓寺惣門再興勸進状』卷子本一軸。三条西実隆の書写。文亀辛酉秋八月初吉勸進沙門の奥書。
- H 成願寺（京都府宮津市）
- ※15 『成願寺縁起』『丹後州宮津府志』卷之三に記載される。
- 1 小谷兵次氏（京都府丹後町間人）
- ※16 『落宮大明神縁起』卷子本一軸か。『丹後町史』に写真が載る。5 『齋明神縁起』とほぼ同内容か。
- J 無量寺（京都府福知山市笠巻）
- 17 『一倉山薬師如来縁起』卷子本一軸。元禄十年相良の奥書。
- K 清徳寺（兵庫県市島町下竹田）
- 18 『清徳寺縁起』絵巻、一軸。江戸中後期の書写。南北朝期の原本の存在が想定される。
- L 彌能富子氏（京都府与謝郡野田川町字石川）
- 19 『彌能師縁起』卷子本（未軸装）一卷。江戸後期の書写。
- M 福寿寺（京都府与謝郡野田川町字石川）
- 20 『彌能師縁起』卷子本（未軸装）一卷。江戸後期の書写。

以上、二十二点の資料を確認することができた。その内の※印以外の十七点については、原本の調査ができたものである。一見して、その伝承地に神社仏閣が多く、麻呂子親王の伝説が寺社の縁起として伝えられている状況が窺えよう。

これらの資料の中で最も古いものは、Aの清園寺に存する1の掛幅絵『清園寺縁起』で、十四世紀前半まで遡るものである。また、K18の『清園寺縁起』絵巻も南北朝期の原本の存在が推定されるもので、南北朝期から麻呂子親王の説話が、絵画化して伝えられていたことが窺え、そのことについては拙稿で論じたことがある。Bの竹野神社には4の室町末期作の『等遠寺縁起』絵巻、5の江戸初期作の『齋明神縁起』絵巻が伝えられており、やはり、この説話が絵巻などの絵入りの形で伝わっていることを窺わせている。

このような絵画化された麻呂子親王鬼神退治説話が、能作者である観世弥次郎長俊の目にとまり、能『丸子』が制作された動機や過程については、拙稿ですでに考察したところである。さて、これらの文献資料だけでなく、麻呂子親王に関わる伝説が、菅田完氏による広汎な調査により、丹後・丹波の一带に

- 21 『麻呂子親王大江山鬼神退治繪巻物』絵巻一軸。江戸後期の模本。原本は古いか。
- 22 『丹波國大江山由来根元』仮綴じ二下。いわゆる略縁起で、版木は清園寺に現存する。



麻呂子親王伝承文献所在地図

点存することが知られており、中でも福知山市から大江山の間
 辺、そして北端の丹後町にかけてに伝承地が多いことが認めら
 れる。そして、この地域には、麻呂子親王に付き従ひ中興よりやっ
 てきて、鬼神を退治した後に丹後・丹波に居着いたと称する
 人々がいた。いわば鬼神を退治した勇者の後裔である。

一 鬼を退治した者の後裔

『丹府志』は、天保十二年（一八四一）に小林玄章等の撰
 になる丹後の地誌である。その竹野神社の項に、
 百灯籠の左に社司桜井氏の宅あり。…本社内に丸田の
 社といふあり。是桜井氏本祖なり。昔麻呂子皇子に随従し
 とあつて、現在でも宮司をつとめる桜井氏が、麻呂子親王に從
 つて鬼賊を退治した者の子孫であると記している。
 このような麻呂子親王の家来を各乗る家は丹波、丹後に点在
 しており、はやくから報告されていた。たとえば、小室洗心氏
 の「麻呂子親王と与謝村の勢旗氏」は「勢旗を捧げて軍に從つ
 た者が皇子より勢旗の姓を給はり、其の子孫が今尚ほ与謝村字
 山河に榮えて居ると云ふ」と、勢旗氏のことを記している。
 また、麻呂子親王の伝説を採録された菅田宗氏氏は「麻呂子親
 王伝説の研究（4）」において、
 福知山から河守付近には古來麻呂子親王の子孫又は親王の
 從臣の後裔と稱する氏が多い。山口先生は天田郡志資料に
 次のような氏姓を挙げておられる。高橋氏がそれで丹波志

子孫住入、今下田村二字坪ノ内ト云所、旧栖也。後此
 牧村六人衆ヨリ野端村屋敷地ヲ買求メ、代々居之。
 と記されており、小田家は江戸時代より麻呂子親王の家臣の子
 孫として知られていた。
 この小田家について菅田宗氏「麻呂子親王伝説の研究（5）」
 は、「当麻寺へ当地方から梁年参詣しつづけた家系があり、そ
 の氏は当麻氏の子孫と稱し、或いは麻呂子親王の鬼退治に從
 うたという由緒ある家である」と紹介された。
 麻呂子親王は用明天皇の第三皇子で、聖德太子とは異母兄弟
 にあたるが、当麻寺の創建者とする伝承があり、当麻氏の始祖
 とされる人物であるから、小田家が当麻氏の子孫を稱すること
 は、麻呂子伝承を考へる上で注意されるべき点である。
 小田家には、先祖が鬼退治した際に親王から賜つたとされる
 鏡が伝えられ、毎夏土用の丑の日に取り出して祀られていた。
 鏡は女性に触れることを禁じられ、必ず主人が取り出して飾
 り、近在の者が拝みに集まつたことである。この鏡は福知
 山市御勝八幡の「シシノ子ノ田染」に貸し出され、田染を奉納
 する際に前立ちの武者が着用することになつていたことが報告
 されている。
 なお、シシノ子ノ田染は源頼光が酒吞童子退治に赴く折に
 に、戦勝を祈願して奉納されたとの伝承があり、それに麻呂子
 親王から拝領の鏡が用いられるのは、同じ鬼神退治譚の接点と
 して關心をそそられることである。
 ともあれ、このように興味深い伝承を有する小田家である
 が、残念ながら既に退転してしまつて、今では屋敷など跡形も

に高橋彦左衛門、齋物、權頭等が見え、又高橋形部大輔高
 泉というものがある。此先祖は麻呂子皇子の家臣である。
 又、乾氏、小田氏、中西氏等も亦皇子の家臣の高である。
 壇羊・松陰の中である。丹後河守に久しく住すと。次に小
 田氏はその先祖が麻呂子親王（又金丸親王ともいふ）の四
 天王の中で河内の小田村に子孫住すと記しておられる。公
 住という姓は川口辺に、公手は龍部に、高橋は鹿我、雀
 部、六人部等に多い。
 と、高橋・乾・小田・中西・公手・公住の諸氏を挙げてい
 る。さらに、西尾正仁氏は、「麻呂子皇子伝説と家伝承」におい
 て、足安村（竹野郡丹後町）の難波家・石川村（与謝郡野田川
 町）の難波家・与謝村（与謝郡加悦町）の勢旗家・長田村（福知
 山市）の高橋家・野花村（福知山市）の小田家の諸家を紹介さ
 れ、「竹野神社系の麻呂子皇子伝承は宮司桜井氏を筆頭に、麻
 呂子皇子に付き従つた家臣の子孫と主張する家々を中心となつ
 て成立したものと考へることができると考へられている。
 これらのような麻呂子親王の家臣を各乗る家の中でも、早く
 から注目されていたのが福知山市野化の小田家である。

三 小田家における伝承

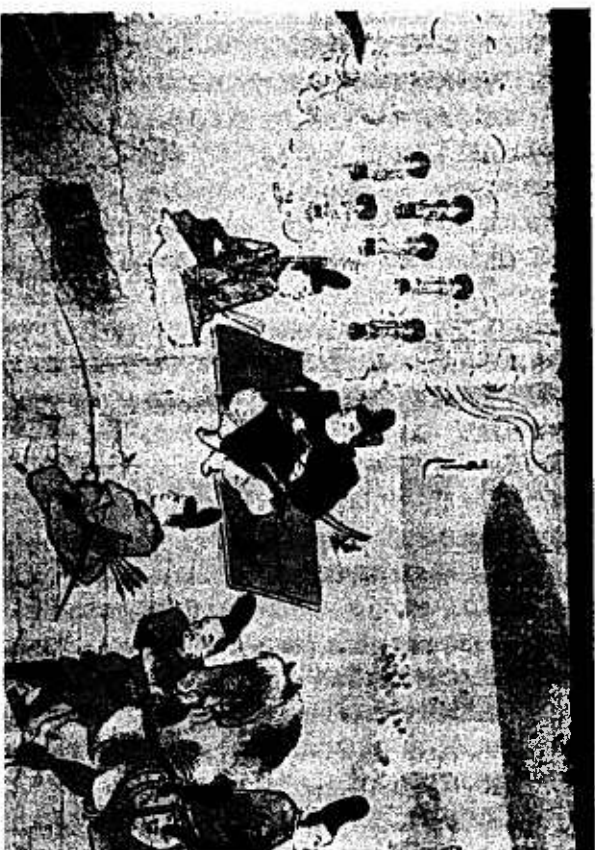
寛政七年（一七九五）に刊行された丹波の地誌である『丹波
 志』には、
 一、小田家 子孫 野端村
 先祖八麻呂子親王ノ臣ノ号入内也ト云。河口郷小田村ニ

ない状態である。しかし、菅田氏が昭和二十三年に披見した資
 料が論文中に紹介されており、それらによつて伝承の概要は知
 ることができる。
 それによると小田家は当麻氏の子孫を名乗るだけでなく、系
 図を残していた。論文に引かれる「当麻氏系図」の約書による
 と、次に引くごとく麻呂子親王の二番目の子である小林麻呂か
 ら当麻真人為時、そして從五位為國と続く家系であるとされ
 る。
 仁王三十貳代 用明天皇 — 麻呂子親王 —
 麻呂嶋王 — 小林麻呂 — 当麻真人為時 — 從五位為國 —
 女当麻姫 — 当麻真人為文

注意すべきは、その系図の後ろに、「右貴、和州葛下郡、土
 庫村、当麻氏祖、当代土庫平助、為國より当代まで四十四代二
 成」と記され、さらに「例年四月十四日、於当麻寺講り供養大
 會也、十三日迄二御入來、大坂より平野、園分峠を越し下田村
 より五十町東往、葛下郡土庫村当麻家、俗二油屋平助二男兵右
 工門憑之、右御城下度候」と走り書きがあつたとすることで
 ある。右の文中で「当麻寺講り供養大會」の「講り」とあるの
 は「講り」の誤写か、菅田氏の誤解によると思われる。つまり



【図A】『清園寺縁起』における親王が親の奏師像を刻む場面



【図B】『寄葉寺縁起』における親王が親の奏師像を刻む場面

当麻寺で旧暦の四月十四日に行われる二十五菩薩米迎を顕現させた練り供養のごとであらう。この書き付けから、菅田氏は小田家の人々が当麻に毎年参詣していたと推測されているが、毎年とは行かないまでも本國である大和の当麻へ参詣し、練り供養を見学していたことが窺え、小田家と大和國当麻の地との結びつきが想定されるのである。

さて、小田家の伝承で特に興味を引かれるのは、「代替わり毎に丹後竹野村宇宮の斎大明神へ饗幣（二本）を献上した。小田家でしつらへた饗幣を村次で送り、竹野村に伝えたもので、当家は今も饗幣に添えて送った板符が残されている」と報告されることである。板符は、一枚同一のものを作り、一枚は小田家に保存されていたように、斎大明神を合祠する竹野神社の社前坂井氏からの献納饗幣到着の通知状が、寛保三年（一七四三）安永八年（一七七九）寛政七年（一七九五）天保五年（一八三四）明治三年（一八七〇）と五点遺つていたとすることで、後に述べるように、おそろくはその年に小田家当主の代替わりがなされたのであろう。

この年送りのことは、江戸時代の地誌類にも記されており、江戸時代より知られていたことであつた。たとえば、『宮津府史』の「竹野社」の項に

の武徳を待伝ふ毎年六月廿の日に是を唐人に觀せしむるなり。また『丹野府志』巻之五「竹野郡宮村」には、丹波天田郡野花に小田孫八郎と云ふ者あり、祭礼に用ゆる饗の卒其者より年々奉る。

と記載されている。『丹野府志』には「祭礼に用ゆる饗の卒其者より年々奉る」とあるが、小田家の子孫であられる高見加那子氏より寄せられた「小田家先祖累代各精進（小田家の過去帳）によると、寛保二年八月三日に「八郎左衛門貞廣」が、また寛政六年九月十九日に「加賀之助貞督」が亡くなつていことが知られる。両者が死去したその翌年に饗幣が送られていることは偶然ではあるまい。菅田氏が調査されたごとく、小田氏が代替わりする年に奉納したというのが本場のところであらう。そして、この行為は、小田氏が竹野神社に祀られる麻呂子親王に麥わらぬ忠誠心を示す印であつた、とも考えられるのである。

野花の小田家と並んで興味深い伝承を有する家に饗家があら。京都府与謝郡野田川町字石川に居をきためる饗家は、「野田川町誌（昭和四十四年）に「同郡の福寿寺（野田川町石川にある臨濟宗の寺）には、第二の「漢師留瑠光如来像」を祀つた。麻呂子皇子が、「字津木」の饗と奏師如来像とを石川の吉田氏（臣鎌足の子孫と云う）に賜ひ、やがて、吉田氏は、饗氏と改め、寺院を建立した」と記される旧家である。

麻呂子親王が鬼神神皇治を祈念して自ら饗を刻んで奏師如来像

四 饗家における伝承

を作ったことは、先に挙げた縁起資料からも知られる。まず、Aの「沼間寺縁起」であるが、第二幅にその場面が描かれている「図A」。鏡を戴いた白犬を前にした衣冠束帯姿の麻呂子親王が座して何かを削っている様子が見えよう。B「等榮寺縁起」にも同じ場面が見られる「図B」。これは棒状のものを削っている親王の姿と、傍らに六体の薬師が影向している様子が認められる。この場面には「わう丹後國雲原ほとけににて／＼つきの御むちにて薬師如來／七鉢御手つからせ給ひけり／七鉢の如來像を七ヶ所に各御くわん／しやうありぬ」と画中詞が記されている。B5の「清明神縁起」と、K18の「沼間寺縁起」にもほぼ同じ様な図柄が描かれ「沼間寺縁起」には「等榮寺縁起」と同じ詞書きが添えられている。親家は、この皇退治におけるきわめて象徴的な行為から姓名を賜った家なのであり、麻呂子親王より下賜されたことされる。全長八二・五厘の鏡も節入りで広がっている。ところで、親家には次の三種の系図が蔵されている。イ「禪吉田姓系圖書抜」写本、巻十本（末軸巻）一卷。ロ「由緒書抜」写本、袋綴一冊。ハ「本親家系圖書抜」写本、仮綴し（紙針巻）一帖。イの「禪吉田姓系圖書抜」とロの「由緒書抜」はほぼ同内容で、イの巻十本が原本で、それを下巻に転写した本がロの冊子本であると思われる。奥書から万治三年（一六六〇）に書きされたこと分かるが、両書とも「書抜」と題すること、また本文中にも「本系に……」とする記事が見えることから、

上山、作城筑、又有遺樓夜叉、住于同州竹野郡間人郷北海濱、是又海賊張本也、各領其衆如竹林、或動會沽客運送餘、或查唐商旅往來人、依之木陰隱匿而民苦于深炭、茲有年彼處遙遠天聽、帝大憂惱之曰、有過在朕一人、乃譴羣臣曰、今何人能得伐彼凶徒致天下於太平者乎、羣臣僉曰、九子親王哉、親王第三皇子是也、帝即命親王曰、爾慎理軍軍運至北海誅伐凶賊而、恭行天罰以安撫黎民矣、皇子敬奉命退思念、彼旛旗衆甚多、且勢力絶人、我不馮佛陀威神力、爭得容易峰伏魔衆、於此誓曰若果成心願者、於彼國中自彫刻七尊藥師佛而、期寶賢以為佛國云畢、即日發陣北丹陽之嶺賊等率黨前、自三上山而、降還守河邊、堅營旌而對待皇子、然又有彼地天照皇太神誕生之靈蹟、高山環峙澗水繞流松柏森矗一鳥不鳴、幽邃閑寂官製村古蓋茅茨、皇子臨河拜祭、至切懇摯曰、今此神本朝太祖我國宗廟也、何見朕疾苦不忍唐指乎、早明神威速示冥對、然皇子對陣之間、一朝天降大霧不分眼色互相誰何、皇子大喜語士卒曰、惟寇神之內助也、利必有不虞霧中條遼河險入等數戰攻、於此賊軍大敗、賊等終卒殘兵而、奔于北海濱合體於迦樓夜叉、皇子亦逐北追亡、路經與瀨郡、々在石川庄、々有豪族、吉田某申、嘗從軍東歸卒家唐進皇子曰、吉田好讀書、途險通賃、皇子若使復為而、一時誦呪、皇子致真言命風櫃下急前驅、井皇子所持以字取本之體彫刻長一十八分、藥師佛、而脚吉田曰、爾能奉此尊像內破佛、則子孫絶々福壽海無限、吉田奉敬受命勇軍後、創一字寶號、又更命佛工作一觀藥師、皇子所作有小佛胎于其胸出而安置御堂上

矣、從此靈益新、求則精則必應、四民欣格如一日、時人號曰藥師、吉田亦曰改氏為禪、是蓋深歎藥師之謂乎、尔來禪氏相續而世為臣民、斯數百年也、藥師亦感光輝然現坐道場矣、豈不見佛言我法者付闕國王大臣有力之臣越、是實皇子親受金口之傳付者歟、然皇子逐凶賊至海濱、滅彼三凶之地達天照太神之廟躬親事宗廟而、自禪宮故今禪大明神者是皇子廟也、民至今于歲時無怠皆也此の縁起が他の麻呂子親王鬼神退治の縁起と違つて特徴的なのは、後半の傍線部分である。すなわち、麻呂子親王が英胡、土娘の魔鬼を追撃した途次に、與瀨郡の石川庄で吉田氏という豪族と出会う。吉田某は、皇子を歓迎し、我等を先駆けとしたならば、忽ちに残りの賊を追治することができるであろうと、追撃の道案内を買つて出る。皇子は喜んで配下とし、先駆けを命じ、また、それと同時に皇子の持つている宇都木の禪で、長さ一十八分の薬師佛を彫つて与える。吉田氏は喜び、戦功をなしたあとに宝殿を建て、別に一体の薬師仏を作つて下賜の薬師を胎内仏として堂内に安置する。これを禪薬師と呼び、吉田の姓を改めて禪と稱した、という禪薬師と禪家の由来が記されているのである。ここで「創一字寶號、又更命佛工作一觀藥師、皇子所作小佛胎于其胸出而安置御堂上矣」と述べられる薬師を安置する堂塔が、現在の福寿寺である。現在では別に作られた本尊とする薬師如来像はないが、小さな仏像が残されており、それについては後に触れたい。

依拠した資料があつたと推測される。1本には「禪吉田姓系圖書抜」とまず端造り題があり、その次に「本國大和國吉田／丹後在任千二百年／餘世し万治三年マ子」と後補注記あることから、禪家の本國が大和の國吉田であることが知られる。さて、系図は、天原屋相尊より十八代に鎌太夫（中臣鎌足のことと思われる）、それより五代に高道大連と続き、その三男が吉田姓の元祖であると記される。そして「親王より禪氏ヲ給フ」と記され、「此間之事本系二詳ナリ」と注される。もともと、この系図の内容が全面的に信じられるわけではないが、禪家がその祖先を吉田氏とし、麻呂子親王から禪姓をいたいただいたことを系図の上でも明言していることを、ここでは押さえておきたい。

五 親家に伝来する縁起資料

親家には縁起を記した文献資料も存する。外題・内題ともになく、内容から私に「禪薬師縁起」と仮題を付した。江戸後期の書写と思われる。内容は、他の縁起と同様に麻呂子親王が勅命により英胡・土熊と迦樓夜叉の鬼賊を追治する語であるが、部分的に「一覽に示した」17の無單寺の縁起に近い記述となっており、その関係が推測される。次のその全文を挙げよう（後補と思われる付訓は省き、便宜、句読点を施した）。
原、夫丹後州石川庄禪薬師者、當于吾國人皇三十二主用明帝御宇、有山賊、一曰英胡、一曰英胡、在于當國加佐那三

釋家にはもう一点、簡単な自家の由来を記した文書が残されている。

江戸後期の書写と思われ、端作りに「釋氏再造堂之記」と内題が記され、明和三年（一七六六）の奥書が記されている。

ここでは、また先の縁起と少しかわつた内容を伝えている。

于此、用明天王第三之王子金丸親王、承詔幸行營國、親王先遣治惡鬼、為救村民之苦、恭立齋願、以禱作藥師如來尊像矣、其時朝臣高徒大和國吉田庄供奉來、禱身命上仕

此言云々、親王憐愍正直、惡鬼退散之後、賜彼尊像、及許以釋氏也、以故作家宅於此地建堂宇於屋之東、而安齋尊

千有餘年、堂宇家宅至今綿々無事也、是即如來之佛德神

明定鑿也、年代深遠事故口（新）數回、每存古柱一根、况

弟而新造之、亦乘嘉例體古柱一根用新材千株、華屋忽圓

成也、仰願佛陀神明瞻護、宋無恙鎮守火災永消、家門繁

興子孫長久矣

明和三年丙戌仲秋大吉梓日 歛書

※1...「金」を三七ケチにして「子」と補記する。

※2...「口」「日」と「折」を重ねた字と「數」の間に「新」を補入する。

用明天王の第三之王子金丸親王が詔をうけて惡鬼退治に當國

に來た時、村民の苦を助けるために誓いを立て、禱で藥師如來

の尊像を作つた。それを大和國の吉田庄から付き従つてきた家

臣に、惡鬼退散の後に賜り、また禱の姓を許した。釋家では堂

と書かれ、明和六年（一七六九）に作られたことが明らかであ

る。

小さい方は、横が三・五、縦が一四七、縦が一四七、横が二

七、横が二、縦が二、横が七、縦が八、縦が七、横が二

と書かれていて、【D】「靈宮大明神」と大きく墨書された下に、

右に小さく「明和六年丑暮秋石川庄」左にやや大きく「釋氏」と書かれ、

明和六年（一七六九）に作られたことが明らかである。

江戶後期の書写と思われ、端作りに「釋氏再造堂之記」と内

題が記され、明和三年（一七六六）の奥書が記されている。

ここでは、また先の縁起と少しかわつた内容を伝えている。

于此、用明天王第三之王子金丸親王、承詔幸行營國、親王先遣治惡鬼、為救村民之苦、恭立齋願、以禱作藥師如來尊像矣、其時朝臣高徒大和國吉田庄供奉來、禱身命上仕

此言云々、親王憐愍正直、惡鬼退散之後、賜彼尊像、及許以釋氏也、以故作家宅於此地建堂宇於屋之東、而安齋尊

千有餘年、堂宇家宅至今綿々無事也、是即如來之佛德神

明定鑿也、年代深遠事故口（新）數回、每存古柱一根、况

弟而新造之、亦乘嘉例體古柱一根用新材千株、華屋忽圓

成也、仰願佛陀神明瞻護、宋無恙鎮守火災永消、家門繁

興子孫長久矣

明和三年丙戌仲秋大吉梓日 歛書

※1...「金」を三七ケチにして「子」と補記する。

※2...「口」「日」と「折」を重ねた字と「數」の間に「新」を補入する。

用明天王の第三之王子金丸親王が詔をうけて惡鬼退治に當國

に來た時、村民の苦を助けるために誓いを立て、禱で藥師如來

の尊像を作つた。それを大和國の吉田庄から付き従つてきた家

臣に、惡鬼退散の後に賜り、また禱の姓を許した。釋家では堂

と書かれ、明和六年（一七六九）に作られたことが明らかであ

る。

小さい方は、横が三・五、縦が一四七、縦が一四七、横が二

七、横が二、縦が二、横が七、縦が八、縦が七、横が二

と書かれていて、【D】「靈宮大明神」と大きく墨書された下に、

右に小さく「明和六年丑暮秋石川庄」左にやや大きく「釋氏」と書かれ、

明和六年（一七六九）に作られたことが明らかである。

七 福壽寺の縁起と小仏

觀王から釋姓を賜つた釋家なのである。

た。さらに、祭札の旗を持参して参加したのが、やはり麻呂子

奉納したのが、麻呂子親王の家来を名乗る野花の小田家であつ

た。そして、その祭札に旗竿を

こゝで想起されるのが、竹野神社の宮司である坂井氏が麻呂

子親王の家来を称することである。そして、その祭札に旗竿を

奉納したのが、麻呂子親王の家来を名乗る野花の小田家であつ

た。さらに、祭札の旗を持参して参加したのが、やはり麻呂子

親王の家来を稱することである。そして、その祭札に旗竿を

奉納したのが、麻呂子親王の家来を名乗る野花の小田家であつ

た。さらに、祭札の旗を持参して参加したのが、やはり麻呂子

親王の家来を稱することである。そして、その祭札に旗竿を

奉納したのが、麻呂子親王の家来を名乗る野花の小田家であつ

た。さらに、祭札の旗を持参して参加したのが、やはり麻呂子

親王の家来を稱することである。そして、その祭札に旗竿を

奉納したのが、麻呂子親王の家来を名乗る野花の小田家であつ

た。さらに、祭札の旗を持参して参加したのが、やはり麻呂子

親王の家来を稱することである。そして、その祭札に旗竿を

奉納したのが、麻呂子親王の家来を名乗る野花の小田家であつ

塔を家屋の東に建て、尊像を安置して藥師と呼び、堂塔を福

壽寺とした。以来、千有餘年、古柱をいかにして数回の改築が

なされ、明和三年にいたつて求馬（当時の釋家当主。系図によ

ると六十四世の足坂、文化十三年（慶應）が新造營をしたといふ

内容である。

本資料は題名が示すごとく、釋氏が堂宇家宅を再造營したこ

とを記したものであり、末尾に「家門繁興子孫長久」と結ぶこ

とく、一家の繁栄を尊願した類文的性格の強いものと言えよう

が、注意すべきは、祖先が大和の國吉田の庄から親王に付き従

つてきたことを述べる点である。ここに系図と同じく、自家の

歴史を明示しようとする意識が窺えよう。

大和國の吉田庄という、いくつかの同地名が検索される

が、その中でも最も注目されるのが生駒郡吉田庄、現在の平群

町吉新・三郷町・斑鳩町の辺りである。言うまでもなく、この

近くには麻呂子親王の異母兄である聖德太子が開いた法隆寺が

あるなど、古代大和朝廷と關係の深い所であり、釋家の祖先

は、その吉田庄から丹後の鬼神征伐に従軍したことを自稱して

いるのである。これは、小田家が当麻氏を祖先とし、当麻の地

と長く關係を保つていたことと同様に、自家の本拠地が大和に

あることを強く意識するとともに、他に主張していると受け取

れよう。

ところが、釋家に伝來する物で最も興味深いのは、齊大明神

の幟旗が大小二つ残されていることである。

六 釋家の幟旗

ところが、釋家に伝來する物で最も興味深いのは、齊大明神

の幟旗が大小二つ残されていることである。

ところが、釋家に伝來する物で最も興味深いのは、齊大明神

の幟旗が大小二つ残されていることである。

ところが、釋家に伝來する物で最も興味深いのは、齊大明神

の幟旗が大小二つ残されていることである。

ところが、釋家に伝來する物で最も興味深いのは、齊大明神

の幟旗が大小二つ残されていることである。

ところが、釋家に伝來する物で最も興味深いのは、齊大明神

の幟旗が大小二つ残されていることである。

ところが、釋家に伝來する物で最も興味深いのは、齊大明神

の幟旗が大小二つ残されていることである。

ところが、釋家に伝來する物で最も興味深いのは、齊大明神

の幟旗が大小二つ残されていることである。

ところが、釋家に伝來する物で最も興味深いのは、齊大明神

の幟旗が大小二つ残されていることである。



【図C】小さい方の「齋宮大明神」幟旗



【図E】福寿寺蔵の小仏二体



【図D】大きい方の「齋宮大明神」幟旗

斎時の齋家当主は、了心を祖父と書いているので六十二世の次
 茂系図によると享保二十年没と言うことになる。ともあれ、
 この縁起は福寿寺と齋氏の深い繋がりや物語についていよう。
 そして、何よりも興味深いのは、麻呂子親王が自刻したとい
 う木製の漆師如来像が二体伝わっていることである【図E】。
 並べた置いた携帯電話と比べると、その小ささが明らかであろ
 う。
 大きい方は、高さ一五・五センチ、幅が三・四センチ、厚さ
 一・八厘という小像で、小さい方は、高さ九・五センチ、幅一
 七センチ、厚さ二・〇厘というもので、『齋家師縁起』に記さ
 れる一寸八分には及ばないものの、まさに小像というのに相応
 しいサイズである。惜しむらくは上半身の左側に破損が認めら
 れる。仏像としての美術史的な価値はもとより、その造形の仕
 様や制作年時に関しても判断が付かないが、小さな方が漆師如
 来らしく古色を残しているかと、素人眼には見られる。
 もちろん、これらを麻呂子親王が自刻したとは思えない。留
 意すべきは、麻呂子親王鬼神退治伝承の流れの中で、この像が
 親王自刻のものでされ、齋家に縁ある福寿寺に伝わっていると
 いう事実なのである。

八 齋氏の素性

さて、齋家と福寿寺は、室町時代に丹後の守護であった一色
 氏が、丹後府中と並んで根拠地の一つとした石河庄の石川城の
 ちょうど居館部分に立地すると考えられる。齋家の庭園は、石
 川城の土塁に作られており、齋家駒の福寿寺にあがる道は立

小路（たてこうじ・川館小路）と呼ばれていることなどから、禪家と福寿寺は、一色氏の守護所石川城における守護居館であった可能性が高い場所に立地しているのである。これらのことから、禪家は石川庄一色氏の一族や、または有力被官であったことが考えられよう。ところが、一色氏と禪家との関係を物語る確かな史料は見当たらない。

先にあげた系図・口によると、禪家の平安期の歴代である、額頼政から「源」の一字をいだけいて「源次郎」を名乗った季祐が、建久元年に源朝朝が上洛の折りに与謝郡・加佐郡の内六郷を安堵され知行したとする。その子の孝尚の時に「石川ノ庄ヲ知行シテ石田二居住」し、それより八代後である次秀が嘉吉元年に石川本庄に移ったとされる。さらに四代下つて貞綱の時に、「葛岡与市郎（細川越中守也）師ノ礼ヲ為シテ兵事ヲ談入、強氣ニシテ不屈、丹後半國ヲ切り取ル、異名ニ鬼鬘河ト云とあつて、細川氏の被官であつたことを記している。貞綱に男子が無かつたので政綱が養子に入り、その次が佐綱で、永禄七年の生まれて明暦三年の没とする。その次が綱政で、吉田源兵衛と名乗り、天正十五年生まれ寛永十一年の没、その弟が信政で名を了心と称し、京極家に使えたと記されるが、それらを裏付ける資料はない。

一方、系図八には、「信政六十世迄之細敷事者由緒書抜有り」とことわつて、第六十世信政をはじめとして七十世までが記されるが、その見返しに、

寺ノ過去帳ニ八了心ヲ先祖ト書出之有り候得共、全ク住職ノ職事ニテ口之事ヲ書出之居リ候也

が一方、これほど謎の多い家もまたない、と言ふことになるのである。

九ま とめ

右のように謎は残るが、この禪家の祖先が麻呂子親王の鬼神退治に従い、その後丹後に住住し、禪から刻んだとする薬師如来を伝えていくことは、丹後の歴史の上で大きな意味を有すると思われる。つまり麻呂子親王に大和から付き従つて来た薬師が、皇子の鬼神退治を祈念した薬師像を護持していたことになり、麻呂子親王の後裔であることを主張することで、石川庄一帯の守護としての権威を示していたことが、考えられるのではないだろうか。

また、高明神の祭礼に「斎宮大明神」の旗を持つて参加していたことは、旗竿を小田家が納めるのと同様に大きな意味を有すると思われる。すなわち、斎大明神の祭礼の折りに桜井氏のものと、麻呂子親王の家臣団の後裔が集まり、その場で鬼神退治の後裔はその記憶を新たにし、先祖が丹後の地を平定したことの誇りを確認し合つたことであろう。

麻呂子親王の臣下の家は、一様に親王から下賜されたものを伝承していた。小田家の變、禪家の變がそうであるが、先に挙げた勢旗氏は、その名のごとく、禪家と同じように麻呂子親王の軍旗を賜つた家であつたとも考えられよう。

先に掲げた「麻呂子親王伝承文献所在地図」の伝承地を見る

と、南の方から、兵庫県市島町区、福知山市、大江山町（河守）A・Cへと繋がる今の国道一七五号線のルート、さらに北へ加

とあつて、菩提寺の過去帳には信政を禪家の始祖と記されていることである。

系図・口には六十世の信政までが記されているので、それに續けて系図八を書き足したという形であるが、菩提寺の過去帳に記されるごとく禪家の確かな歴史はこの信政あたりから始まるのかもしれない。

ところで、禪家には、包紙に「細川玄曾公眞跡ノ藤河拝領ノ禪氏」と墨書される室町期の謄本の遺存する。「狸々・安宅・芦刈」の三番を合写したもので、先の二番は細川幽斎の筆、芦刈は浅井采女の手と伝えられるものである。この「藤河」は系図の中で「鬼鬘河」の異名をとつたと記される貞綱のことであろう。系図中にそのエピソードとして「口伝云、細川玄曾公ヨリ小故ノ相伝有之云々」と記されることから、禪家に幽斎から小故の相伝があつたことも窺われ、この謄本が幽斎から拝領したと伝えることもあながち否定できない。このことから、系図に記される室町後期の人々は、江戸初期に系図が調整された時点で、家伝として記憶にあつた人々であつたことも考えられよう。

また、禪家には重要文化財に指定される後光厳天皇の書簡も所蔵される。しかし、内容は中央の政治に関するもので、禪家や丹後にかかわるものではない。発見者によると、後からの蒐集によるものではないが、伝承を示す根拠もまたないといふ代物である。

以上のように、禪家は、立地・所蔵品・伝承など、中世丹後にかわるきわめて重要な資料を提供してくれているのである。

悦町E、野田川町J、Mの国道一七六号線を経て、三二二号線を大宮町、峰山町、そして、四八二号線沿いに弥栄町F、丹後町Bへと続くルートに麻呂子親王伝承は色濃く残つていくことがわかる。そして、これは、麻呂子親王が南から進軍し、大江山の英胡・土熊（土蜘蛛）を追いやり、さらに北に権威復元と連合した三鬼を追いつめて退治した道筋と重なる。これは単なる偶然とは思えない。麻呂子親王が征服した土地にその家臣を名乗る人々が居つき、麻呂子の伝承を伝えながらその地を統治していることと理解できるのである。それらの家々に伝わる麻呂子の話は、一帯にその記憶をよどめ、勇者の後裔として相伝い家柄を示すものであつたと考えられるのである。

注

- (1) 拙稿「清徳寺縁起絵巻考―麻呂子親王鬼神退治説話の研究（上）」（『大谷女子大学紀要』37、平成十五年三月）。
- (2) 「親世長俊の作能法における一特色―『丸子』をめぐって」『能と狂言』一頁、平成十四年四月）。
- (3) 青田完「麻呂子親王吉丹渡鬼族退治伝説の研究（上）」（京都短期大学論集、第四卷第一号、昭和五〇年三月）。
- (4) 小室洗心「麻呂子親王と身兼村の勢旗氏」『洗心集』昭和八年）。伊藤大氏の御教示による。
- (5) 『ぶくち山』第二二号（昭和四十四年十月、福知山史談会）。
- (6) 『薬師信仰―瀧雨の仏から温泉の仏へ』（平成十二年、岩田書院）。
- (7) 『ぶくち山』第二二号（昭和四十四年十一月、福知山

(8) 『福知山市北部地域民俗文化財調査報告書』三原山をめぐる芸能と信仰(平成十四年、福知山市教育委員会)。

そこに収録される大正八年「御勝大祭記録」によると、

「九月四日野花森へ舟子親王様ノ御借、及公庄三子赤衣借

り二松田延慶氏出張ス」とあり、野花の小田家より麻呂

子親王の御を借り、また、同じく親王の家臣の子孫を所

する公庄家にも赤衣を借りたことが記される。ま

た明治四年(一八七二)「御勝廿五年祭諸事入用帳」に

は「一拾五匁 切も五百匁 野花小田氏えよらういか

り社」と小田家に御を借りたことが記される。

(9) 系図三種の書誌は次の通り。

1 『櫻吉田氏系圖書抜』

写本、卷子本(木軸装) 一巻、料紙は、楮紙。寸法は、

縦三・〇×全長二九四・八(全五紙で、各紙の長

さは、①三八・六、②三八・八、③三九・〇、④三九・

四、⑤三九・〇(種)。字高は約二七・〇(種)。書体は、

漢字、平仮名交じり。朱筆の書き入れがあるが、本文

と同筆かは不明。外題はなし。内題は、端作りに「櫻

吉田氏系圖書抜」と打ち付け墨書がなされる。奥書は

末尾に「万治三庚子歲六月吉日」と「本家主入之外口

口「由緒書抜」

写本、袋綴一冊。表紙は、栗皮色表紙。料紙は楮紙。

寸法は、縦二六・七×横一八・二(種)。字高は、約三・

〇(種)。紙数は、一〇丁(遊紙、一丁)。書体は、漢字、

平仮名交じり。朱による同筆の書き入れがあり、別筆

題・内題ともになし。奥書もなし。

(13) 『福寿寺其鏡縁起』の書誌は、写本、卷子本(木軸装)

一巻、精紙二紙を繋ぐ。寸法は、縦三・一×八七・二

(種)。字高は、約三〇(種)。書体は、漢字で別筆と思われる

附訓がある。外題・内題ともになし。

(14) 『宮津市史』通史編上巻(平成十四年)によると、天文

年間、石川には「石川の御殿形様」すなわち「色養清が

原住し、その子を「色氏の当主として府中(宮津)に住

まわっていた」とのことである。

(15) 佐藤晃一氏「世の中加悦、石川、機地、山田」(歴史

探訪丹後の中世社会を探る上、加悦町教育委員会、平成

九年三月)による。

(16) 『月刊文化財』三九四号(平成八年)に新指定の文化財

として紹介される。伊藤太氏の御教示によると、発見者

である石川登志雄氏(京都府教育庁文化財保護課)が、

他の文書に交じってくしゃくしゃの状態で見えられたと

のことである。

(付記) 本稿を成すにあたっては、鎌能富子氏より資料の調査

や掲載についてご配慮をたまわった。また、丹後郷土資料

館の伊藤太氏には、郷家をご紹介されたことをはじめと

して、種々のご教示をいただいた。記して厚く御礼申し上げ

る次第である。

伝承文学研究五十一号

【論文】

金乃比羅本『平治物語』の背景……二松松葉子

一 繪師の頼朝教助説をめぐって

「嗣信屋敷」説話の享受と展開……大橋直義

一 座島・志度の中世律僧唱導

「梅津長者物語」と「牛頭天王縁起」……真下美弥子

一 お伽草子庶民物の型像

「唐茶草子」考……恋田知子

一 唐茶受難伝承から万寿奉行譚へ

「若氣嘲弄物語」は一条米良の作か……田村航

一 室町期の女性観と伊勢注からの検討

説経浄瑠璃「中将姫御本地」の成立……田中美絵

縁談道具の由来……川崎剛志

縁後の酒呑童子……徳田和夫

一 「真縁傳記」の紹介(表紙解説に付して)

編集後記

伝承文学研究会消息

三弥井書店

の付箋もある。外題は、表紙中央に「田新書抜」(種)と刷り墨書に打ち付け墨書。内題はなし。奥書は末尾に「万治三庚子歲六月吉日」と「此書抜難為親族の付箋もある。近世に入つてからの書写と思われる。外

(10) 『櫻葉師縁起』の書誌は、写本、卷子本(木軸装) 一巻、料紙は、楮紙。寸法は、縦三・〇×全長一七二・五(種)。字高は、約二四・五(種)。書体は、漢字で別筆と思われる。外題・内題ともになし。奥書もなし。

(11) 『櫻家再造堂之記』の書誌は、写本、卷子本(木軸装) 一巻、料紙は、楮紙。寸法は、縦三・〇×全長一七二・五(種)。字高は、約三〇・〇(種)。書体は、漢字で別筆等がある。外題はなし。内題は、端作りに「櫻氏再造堂之記」と墨書される。奥書は末尾に「明和三年丙戌中秋大吉様日」

(12) 『櫻葉師縁起』写しの書誌は、写本、卷子本(木軸装) 一巻、精紙を三紙繋ぐ。寸法は、縦三・五×横一四〇・〇(種)。字高は、約三〇(種)。書体は、漢字で別筆と思われる。外

八 『本郷家系圖書抜』

写本、仮綴じ(紙針装) 一帖。表紙は、共紙茶紙表紙。料紙は楮紙。寸法は、縦二八・三×横一九・七(種)。紙数は九丁(遊紙、一丁)。書体は、漢字、平仮名交じりで、書き入れが多い。外題は、表紙に「寶永三年第六十世ヨリノ千秋萬々歳ノ本郷家系圖ノ書抜」と打ち付け墨書される。内題はなし。

(10) 『櫻葉師縁起』の書誌は、写本、卷子本(木軸装) 一巻、料紙は、楮紙。寸法は、縦三・〇×全長一七二・五(種)。字高は、約二四・五(種)。書体は、漢字で別筆と思われる。外題・内題ともになし。奥書もなし。

(11) 『櫻家再造堂之記』の書誌は、写本、卷子本(木軸装) 一巻、料紙は、楮紙。寸法は、縦三・〇×全長一七二・五(種)。字高は、約三〇・〇(種)。書体は、漢字で別筆等がある。外題はなし。内題は、端作りに「櫻氏再造堂之記」と墨書される。奥書は末尾に「明和三年丙戌中秋大吉様日」

(12) 『櫻葉師縁起』写しの書誌は、写本、卷子本(木軸装) 一巻、精紙を三紙繋ぐ。寸法は、縦三・五×横一四〇・〇(種)。字高は、約三〇(種)。書体は、漢字で別筆と思われる。外